



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.104

2012.5.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

阿玉台式土器

— 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 —

塚本師也

第1回

阿玉台式土器とは(1)

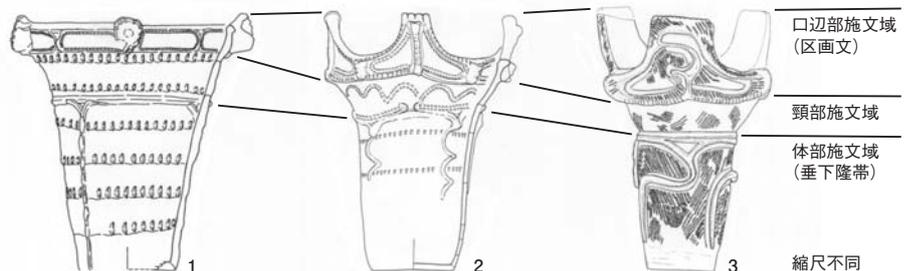
阿玉台式土器は、関東地方東部を中心に分布する中期前葉から中葉の土器である。千葉県香取市(旧香取郡小見川町)の阿玉台貝塚に多い土器を標準として設定された。「阿玉台式」は広く「オタマダイシキ」と呼ばれてきた。しかし標準遺跡は「アタマダイカイツツカ」と読む。阿玉台貝塚をはじめとする利根川下流域の貝塚を組織的に発掘調査し、阿玉台式土器の編年研究を推進した早稲田大学の故西村正衛教授は、「アタマダイシキ」の読み方に拘った。かつて阿玉台式土器の研究を志した者の多くは、西村の研究室を訪れ、彼が調査し、細別の基準とした利根川下流域の貝塚出土土器の観察を通じて、この土器の勉強をした。彼等は「アタマダイシキ」を使う。早稲田大学出身者や地元千葉県の考古学関係者の多くも「アタマダイシキ」と読む。アンケートをとってはいないが、現在では「オタマダイシキ」「アタマダイシキ」の読みが相半ばした状況と思われる。

中期縄文土器、なかでも東日本の中期中葉の土器は、立体的な装飾を特徴とするイメージが強い。ほぼ同時期中部・西関東地方の勝坂式土器、越後地方の火炎土器や東北地方南部の大木8a式土器はその典型である。これらと比較すると、阿玉台式土器は、中空の把手が発達せず、器面に無文もしくは地文のみの部分を多く残し、一見して簡素な印象を受ける。しかし、前半の一時期、混和材として雲母末を混入するため、金粉を鏝めたような外観を呈し、際立った特徴を醸し出している。

阿玉台式土器も、発生期と終末期では大きく様相が異なる。さらに同時期でも形態や装飾のバラエティーがある。しかし、文様構成、文様モチーフ、文様描出技法等において、共通する特徴もある。ここでは、標準とすべき土器を取り上げ、阿玉台式土器全般に通じる基本的な特徴を探り、阿玉台式土器とは何かを考える一助としたい。

深鉢形土器の代表的な器形は、体部が直線的にわずかに開き、頸部が外反し、口辺部が内湾気味に広がる。口辺部、頸部、体部の三帯に施文域を分割する。口辺部の施文域には隆帯によって区画文を配置する。平縁の土器では区画が楕円形となる(第1図1)。阿玉台式土器には、平縁と波状口縁の二者があり、後半になると波状口縁が数のうえで優勢になる。波状口縁では、区画が変形され、直角三角形状となる(第1図2)。さらに、波頂部下の区画の接点部分が、渦巻文

などに転化する(第1図3)。阿玉台式後半期、霞ヶ浦北岸以外の地域では、波頂部下が渦巻文に転化したものが、圧倒的多数を占める。体部の施文域には、縦方向の隆帯文を配し、それ以外の文様は低調である。頸部の施文域は、多くは無文もしくは地文のみである。但し、前半期には、波状文などの簡素な文様を施文するものもある(第1図2)。隆帯の脇、特に口辺部区画文の内側には、竹管等の工具を沿わせることが多い。ただ工具を沿わせて線を引くものもあるが、多くは押し引きをする。時期により、細い竹管状工具を押し引きした「角押文」(第1図1)、幅広い竹管の背や篋状工具を押し引きした「爪形文」が用いられる。口辺部区画文、頸部素文、体部垂下隆帯文の文様構成と隆帯に沿う押し引きという阿玉台式土器の基本的な特徴は、前時期の五領ヶ台式からの系譜であり、勝坂式の古い時期にもみられる。



1.茨城県宮平貝塚

2.千葉県子と清水貝塚

3.栃木県御城田遺跡

第1図 標本的な阿玉台式土器

出典：1：茨城県宮平貝塚 小林謙一、2001、「茨城県宮平出土土器について(2)―阿玉台I・II式を中心に―」『民族考古』第5号
2：千葉県子と清水貝塚 松戸市教育委員会、1978、『子と清水貝塚 遺物図版編1』
3：栃木県御城田遺跡 芹澤清八、1986、『御城田遺跡(遺構・遺物実測図編)』栃木県教育委員会

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■阿玉台式土器 阿玉台式土器とは(1)

塚本師也 …1

■リレーエッセイ マイ・フェイスバレット・サイト(第97回)

岡嶋隆司…3

■考古学の履歴書 良き師・良き友に恵まれて(第3回)

渡辺 誠 …2

■考古学者の書棚 『茨城の考古学散歩』

瓦吹 堅…4

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(第3回)

渡辺 誠

3. 先輩と学友達

東洋史専攻に在籍しながら縄文研究に没頭することは、大きな矛盾であったが、当時真剣には考えていなかった。この矛盾が大きな壁となって立ちほだかったのは、卒業論文と修士論文の時である。しかしこのことは当然のことであり、十分に覚悟しておくべきことであった。その壁を乗り越えられたのは、修士論文に抜歯風習の研究をテーマにしたことであった。詳しくは後に記すことになるが、当初は貝塚や低湿地遺跡への関心を強くし、江坂先生や諸先輩のお陰で、広い視野で研究する方向性が次第に育まれてきた。

もっとも身近な先輩は、考古学の基本的な技術を叩きこんでくれた笹津備洋氏であった。そして可児弘明・近森 正氏であったか、どの方も当時の東洋史の雰囲気や反映して、文化人類学・民俗学にも造詣が深く、その広範な知識の獲得について、江坂先生は言葉を変えて、雑学をせよ、と強く言われた。各地で沢山のいろいろな種類の遺物を見ることや、乱読の勧めなどであった。それらをこまめにフィールド・ノートに実測図などとして残すことも指示された。そのこまめな先生のノートの中から、独鈷状石器の実測図を多数写させて頂いたことは、今ではなつかしい思い出である。

先輩のことに話を戻す。3氏のうちでもっとも学年が近いのは、近森 正氏である。先に記した久保ノ作洞窟の発掘の半年後に、小名浜町(現いわき市)寺脇貝塚の発掘が江坂先生によって行われ参加させて頂いた。この時近森氏は、ときどき見つかる小型のきれいな礫に注意をはらって集めていた。縄文人も目的があって集めていたのかも知れない、そして民俗例では、カゴ類を編むのに使っているところがあると教えてくれた。このことは私の今日の編物石研究の最初の遠いきっかけである。

可児弘明氏は、中公新書に名著『鵜飼』があるように、漁業史に詳しい方だった。

笹津備洋氏は、郷里の静岡県沼津市にもどっても、東名高速道路関係の事前調査がある時はよく呼んでくださった。そしてある時、本当に考古学を続けるつもりなら、厳しい発掘の現場でしごかれなければならないと、登呂の望月董弘氏達と発掘していた静岡県富士市山王遺跡の発掘に参加させられた。望月氏は酒の飲み具合で体調が分かるから、メンバーの飲み具合をよく見ておけと指示され、見落としのため、翌朝トイレの掃除を何度もやらされたのはきつかった。

小野真一・瀬川裕市郎・若月正巳・向坂鋼二・磯部武男・植松章八氏などの静岡県勢とお付き合い頂くようになったのもこの前後であり、笹津氏のおかげである。

これらの静岡県下の遺跡や九州の貝塚の発掘と一緒に参加し、次第に無二の親友となってきたのは、東洋史の同級生高山 純氏である。そして国史の鈴木公雄氏、西洋史の赤沢威氏がいた。大学院は東大に行った赤沢氏には、個人的な人面装飾付土器の研究や、愛知県史の資料調査などで、東大の総合博物館ではよくお世話になった。

また前嶋信次先生に師事していた家島彦一氏には、最近の方が教えられることが多くなった。家島氏は船の研究もされていて、韓国の新安沈没船がバイキングの船と同じだと大きな話題になった時、アラビア・アフリカにすらそんな船はなかったといわれ、一緒に韓国旅行した時にみた高麗船にそのルーツがあると教えてくれたのである。お陰で蒙古襲来の考古学的研究に、私なりに新しい進展を持つことができた。

4. 野口義磨氏から滝沢 浩氏へ

先の3先輩の上には野口義磨氏がいた。武勇伝の多い方であり、年の離れた後輩に面白おかしく聞かせてくれた。あまりに年が離れていたため、お会いすることは少なかったが、時々国立博物館へ伺った。そして氏の蛇体装飾付土器の研究は、後に人面装飾付土器の研究を始めるに際し、とても参考になった。

慶應の加茂遺跡の丸木舟の発掘は同氏からの情報に基づくものである。以後丸木舟の発掘は、慶應の看板テーマとなっていく。旧大宮市膝子遺跡の発掘が、その延長上にあることは言うまでもない。さらに1962年には千葉県八日市場市多古田遺跡の低湿地遺跡の発掘が行われ、参加した。これで私の研究方向は一段と明白になってきた。

当時雄山閣の新版考古学講座が進行中であったが、なぜか大先輩のピンチヒッターとして、縄文前期の東日本を書くことになった。文化圏と植生図を初めて重ねたのはこの時が始まりである。しかしこのことが大きく展開したのは後日話であり、当時は石鏃と石槍を、クマ猟とシカ・イノシシ猟とに对比させたことで、八幡一郎先生から褒めて頂いた。八幡先生は江坂先生の先生であるから、私にとっては大先生であり、格別に嬉しかった。1969年のことである。

またこれにすぐに反応してくれたのは、滝沢 浩氏である。ポイントとナイフ形石器の関係は石鏃と石槍の関係と同じで、立地条件の上でも納得できることであると言われた。ある時東大の人類学教室へ山内清男先生をお訪ねしたところ、廊下に滝沢氏がいて、出版社の人が来ているからすぐには会えないので、喫茶店に行くことになった。そして話はもっぱら狩猟具と獲物の関係に集中し、ナイフ形石器は石鏃と同じという意見の根拠として、使用痕が長軸方向に顕著であること、決してナイフとされる刃には並行していないことを強調されていた。

これで二人は盛り上がり、結局山内先生には会わずじまいであった。後日、私を忘れるほどの楽しい話だった様だねと、山内先生から冷やかされたものである。以来40年もたつて、ようやく滝沢氏の意見が若い研究者に評価

略歴

| | |
|-------------|--------------------------------|
| 昭和13年11月18日 | 福島県平市大町(現いわき市)に生まれる |
| 昭和32年3月 | 福島県立磐城高校卒業 |
| 昭和33年4月 | 慶應義塾大学文学部入学 |
| 昭和43年3月 | 同上大学院博士課程修了 |
| 昭和43年4月 | 古代学協会平安博物館勤務 |
| 昭和54年8月 | 名古屋大学文学部助教授 |
| 平成元年4月 | 同上教授 |
| 平成14年3月 | 同上定年退職、同上名誉教授 |
| 平成15年4月 | 山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで) |
| 平成18年7月 | 日本考古学協会副会長(平成22年5月まで) |

されてきている。しかしその当時誰も見向きもしなかったし、使用痕の研究もなぜかエンドスクレイパーに集中し、主要狩猟具であるかもしれないナイフ形石器については完全に無視されていた。今思い出してもおかしなことであり、滝沢氏の悔しさがよくわかる。上に立つ先生は意見の違いを超えて、客観的なデータを心がけるべきであったし、意見が合わなくても、研究をやめたくなくなるようなことにはしてほしくなかった。

そして研究者は弓もひいたことのない人ばかりだという私の批判に対し、君が和弓なら、私は洋弓をやるといい、庭に古壘を吊るし、盛んに矢をぶち込んでいた。その矢の一本一本に、悔しさが浸みこんでいたことであろう。鎮魂のために書き残す。

102号 考古学の履歴書「良き師・良き友に恵まれて」第2回の文中で「近藤 正氏」とありますが「近森 正氏」の間違いでした。深くお詫び申し上げます。

隔月連載です。次回は石井則孝先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 97

荒神島遺跡群 ～ 香川県香川郡直島町

岡嶋 隆司

荒神島は、東の香川県直島と西の岡山県玉野市向日比犬尻鼻との間に位置する南北約0.8km、東西約1.1km、周囲約4kmの無人島です。行政的には香川県に属しますが岡山県玉野市までは最短距離で約1.2kmと指呼の距離です。

この島は、後期旧石器時代から奈良時代までの遺物が確認されていますが僅かながら中・近世の遺物も確認されています。特に石器の散布地としては古くから知られていたように故杉野文一氏により断片的な紹介がされています。

考古学的調査は、1960年・1981年の岡山大学と1971年の直島町と香川県教育委員会による共同の確認調査が行われています。岡山大学の調査は、旧石器の分布調査のほか、海浜部での製塩遺跡と岬上の古墳、谷部に位置する2箇所祭祀遺跡で行われ、直島町と香川県教育委員会の共同確認調査は、祭祀遺跡で行われました。岡山大学の成果は、祭祀遺跡A地区が5世紀末から6世紀初頭を中心に、I地区が奈良時代を中心としたことが確認され、手捏土器、土師器、須恵器、剣・刀・工具・鏃等の鉄器、滑石製有効円盤・滑石製白玉・勾玉などの祭祀用石製品などが出土しています。製塩遺跡は、製塩土器・須恵器・土師器・飯蛸壺などが出土し、7～8世紀のものと考えられています。古墳は、二重の列石を持つ方墳で頂部に箱式石棺が1基確認さ

れ、墳丘周辺にも箱式石棺が10基ほど確認されました。年代は、出土した精製鉢により弥生後期末葉～古墳時代初頭と考えられています。同時期の二重列石を伴う方形墳墓が備讃瀬戸の海浜島嶼部に展開していることから今後注意する必要があるでしょう。

1990年頃より竹内信三、小野 伸、岡嶋などにより旧石器を中心とした採集作業が個別に行われるようになりました。その内、竹内と岡嶋の表採資料を基にサヌカイト製のナイフ形石器・尖頭器・楔形石器・石核・剥片、ハリ質安山岩製細石核原形などが報告されています。

2007年11月26日には、島の南側中央の高台に位置する縄文時代後期土器散布地の地形測量調査が岡山理科大学富岡研究室を中心に行われました。また、2010年5月9日には同じく富岡研究室を中心島の南東に位置する二左右衛門の鼻で新たに発見された小古墳2基の測量調査が行われました。採集された須恵器片から6世紀後半と考えられています。詳細は近々、報告書として刊行される予定です。

岡山大学が調査した祭祀遺跡I地点には墓石を伴う近世墓が所在し、付近からは、キセルやハサミなども見つかっています。また、他の尾根上でも江戸後期と考えられる陶器製の鉢も採集されており、近世段階でも人々の営みがあったことがわかります。

最後にこの島がたどってきた環境について触れてみたいと思います。この島は、東側に位置する直島の精錬所による煙害で島の殆どが禿げ山となり、表土も雨が降る事に流されて遺物が洗い出されるようになりました。故近藤義郎先生は、1995年に「島は前回訪れた1981年に較べてもひどく荒れていた。北向きの浜近くに形成されていた前方後円墳時代7～8期の祭祀遺跡は、おそらく盗掘と流土のためほとんど形跡無く崩れていた。」と書かれています。その後、場所により松などを中心として少しは緑が回復しましたが1998年の山火事により島の緑は壊滅的となりました。以降、風雨により島全体の浸食が進み、遺物の流失が一層激しくなっていました。2004年9月の台風16号の被害は更に深刻で島全体が一皮剥けたように小さくなって部分的には包含層が消失していました。

現在、NPO法人などにより植林が島の各所で行われて一見良い方向に進んでいるように見えますが深刻な問題も起こっています。写真1は、祭祀遺跡I地点への植林の状況ですが須



写真1「散乱するのは全て須恵器片」



写真2「島の南側、縄文後期土器散布地遠景」

患部の包含層を掘り返して行われており、この状況は島の各所で認められています。風雨による浸食だけでなく人為的な破壊も脅威の一つです。また、植林する植物も在来種でなく外来種のエニシダなどで行われており、自然環境の面からも好ましくない状況です。以上の状況については、2010年4月17・18日に開催された考古学研究会第56回総会にてポスター

セッションで報告しました。現在、荒神島遺跡群以外にも岡山市犬島貝塚や玉野市長崎鼻遺跡、その他海浜部の製塩遺跡など風雨や波などで浸食が進んでいる遺跡が多い状況です。今後も沿岸部や島嶼部の遺跡について注意する必要があります。
※次回のマイ・フェイバレット・サイトは片桐千亜紀さんです。

考古学者の書棚

「茨城の考古学散歩」

茨城県考古学協会編(2010)

瓦吹 堅

茨城県内の高校から東京の大学に進学したのは1966年だった。それ以来、考古学研究室に出入りしながら遺跡の発掘調査にも彼方此方参加し、それなりの経験をした後、県内の調査にも参加するようになった。調査に参加すれば、様々な時代の遺構や遺物についての知識や調査技術が必要で、それらは先生方や諸先輩が調査の中でいろいろ訓練してくれたし、自分なりに工夫しながら覚えた。また先輩達が薦める概説書や報告書なども、昼食代を削って購入した。そんな中、勉強のため県内外の著名な遺跡を見て歩こうとすると結構苦労した事を覚えている。我々の学生時代から最近まで、都道府県ごとの遺跡についての情報は「遺跡地名表」的なものしかなかった。

最近、考古学マニアというか、考古ファンが実に多い。それもそのほとんどが一般人の老若男女である。著名な遺跡の発掘などのニュース報道を見ると、説明者を取り巻くように聞き入るファンの多いこと。

このような時代、考古学的なガイドブックの刊行が目につくようになった。かつて欲しかった遺跡の紹介本である。専門書ではないが、専門家も一般人も遺跡の概要を知るというスタンスでのガイドブックとなった。

茨城県考古学協会は設立30周年を迎えた。30周年の記念としてどのような事業がよいか協議がなされ、一般の県民が郷土の遺跡について平易に理解することができる県内遺跡のガイドブックの作製が目標である。そのガイドブックは、遺跡の紹介を通して、埋蔵文化財の価値や郷土の誇りとしての遺跡の活用を促進することも目的とし、本文382ページのA5版『茨城の考古学散歩』となった。散歩という文字からは、楽しく遺跡を散歩するというイメージが湧いてくる。

例言には、「県内において発掘された遺跡の出土遺物、時代、規模、性格、地域性などを考慮し、重要かつ著名な遺跡を収録した」と川崎純徳会長のことが記されているように、遺跡の位置や特色を明記したものである。

本書では茨城県域を行政区画と同じように県央・県北・鹿行・県南・県西の5地区に分け、300遺跡ほどを紹介している。掲載された遺跡は、原始・古代から近世の遺跡で、開発の波に洗われて消滅した遺跡も数多く含まれ、その調査の成果が収録されている。

紹介されている遺跡を地域ごとに見ると、県央68、県北39、鹿行29、県南96、県西63と地域によっての多少はあるが、その数は開発行為の多寡を如実に表し、首都圏に近

い県南部の遺跡が多く紹介されている。編集員は32名の多人数で、それぞれの遺跡は調査に関係した120人が執筆している。

ガイドブックの目的は、単に遺跡探訪の手引きとなるだけでなく、考古学理解にも繋がるものでなければならないが、本書は易しく遺跡を紹介することによって、身近にある遺跡の価値を一般市民が認識し、さらに自分の目と足で訪ねることによって埋蔵文化財について理解するためのものであり、今後の遺跡の活用についても再考を投じるものとなっている。

各地区の遺跡は、位置・調査年・調査結果・遺跡の性格・遺物の保管場所・参考文献の順で記述され、位置図の掲載は探訪の重要な情報である。また、出土した遺物の保管場所は各市町村などで異なるが、博物館や資料館の施設での収蔵状況ばかりでなく、展示などの情報の入手にも役立つものである。

文末には考古学関係の用語解説があり、難解な用語が多い考古学の世界を、一般の人達が理解するための手助けとなっている。さらに、文中で紹介されていた遺物の保管場所の施設について、所在地と電話番号が明示されているのはうれしい。

本書は、遺物探訪をする一般の人達だけの利用に止まらず、研究者の研究活動にも活用されることを願い、一読をお勧めしたい一冊として紹介した。



アルカ通信 No.104

発行日 2012年5月1日
 発行人 角張淳一
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp